

第1回 京都駅東部エリア活性化将来構想検討委員会

《日時》

平成30年9月8日（土）17:30～19:30

《場所》

下京区役所 4階 第1会議室

《委員》

氏 名	所 属 等	備 考
赤 星 周平	（公財）京都文化交流コンベンションビューロー 国際観光コンベンション部長 （公社）京都市観光協会事務局次長兼国際誘客推進部長	
植 田 義雄	京都美術工芸大学事務局長	
長 上 深雪	龍谷大学社会学部教授	
鎌 田 高雄	稚松連合会会長	
佐 藤 知久	京都市立芸術大学芸術資源研究センター准教授	
高 岡 千浪	京都美術工芸大学工芸学部3回生	
谷 中 知世	市民公募委員	
丹 治 潔	七条商店街振興組合理事長	
寺 川 政司	近畿大学建築学部建築学科准教授	
松 永 洋子	京都市民生児童委員連盟会長・貞教学区民生児童委員協議会会長	
門 内 輝行	大阪芸術大学教授・京都大学名誉教授	委員長

（五十音順，敬称略）

《配布資料》

- 資料1 京都駅東部エリア活性化将来構想検討委員会 委員名簿
- 資料2 京都駅東部エリア活性化将来構想検討委員会規則
及び京都市執行機関の附属機関の設置等に関する条例（抄）
- 資料3 京都駅東部エリアの現況
- 資料4 京都駅東部エリアのポテンシャル及び課題
- 資料5 今後のスケジュール

《議事録》

1 開会

—省略—

2 副市長あいさつ ※市長が海外出張中につき、副市長が代理出席

◆岡田副市長

門川市長は世界歴史都市会議に出席するためトルコへ出張しています。もともとは5日から11日までトルコ出張の予定でしたが、この度の台風で市内にも被害が出ているため、2回にわたり出発を遅らせ、状況把握・指示をした後、トルコへと発ちました。

まずは、皆様方におかれましては、この度の委員の就任について御快諾いただき、感謝いたします。また本日は大変お忙しい中、御出席を賜り、重ねて御礼申し上げます。

今回のテーマとなる京都駅東部エリアについては、京都駅と、その周辺から鴨川の東、三十三間堂までを含む一帯です。鴨川の西側には東西の両本願寺があり、鴨川の東側には三十三間堂の他、豊国神社や京都国立博物館などもあります。いわば京都でも有数の文化ゾーンです。

そして、この地域では、住民の方が主体となり、まちづくりを進められています。例えば、京都市立芸術大学と地域の皆様がコラボした崇仁新町は連日多くの方で賑わっており、その他にも、様々な取組をいただいています。

さらに、今もこの地域は大きく進化・変化を遂げており、昨年4月に鴨川の東にある貞教小学校の跡地には、京都美術工芸大学京都東山キャンパスが開設され、ほぼ5年後には、京都市立芸術大学と銅駝美術工芸高等学校の移転も予定しています。

これまでの多くの方の取組があり、そして未来を展望する中で、この地域の将来構想を策定する運びとなり、皆様に諮問をさせていただくこととなりました。

京都駅の西部エリアでは将来構想、京都駅の東南部エリアでは活性化方針をそれぞれ策定して、すでに活性化に取り組んでいますので、それらと合わせて京都駅の周辺全体の活性化に取り組んでいきたいと思っています。

委員の皆様方におかれましては、御自由な、従来の感覚にとらわれない発想で積極的な御議論、御意見を賜りたいと思います。どうぞ、よろしくお願いします。

3 委員紹介

－省略－

4 委員長の選出

－省略－（長上委員の推薦により、全委員の合意の下、門内委員が委員長に就任）

5 京都市長からの諮問

◆岡田副市長

【諮問内容（抜粋）】

京都駅東部エリア活性化将来構想（仮称）の策定に関する次の事項について、貴委員会の御意見を賜りたく諮問いたします。

<諮問事項>

京都駅東部エリアについて

- 1 当該エリアの将来像
- 2 将来像を実現するために必要な施策
- 3 その他必要事項

6 委員長あいさつ

◆門内委員長

私は2016年3月まで京都大学におり、2016年4月から大阪芸術大学へ移りました。現在、京都大学では名誉教授の称号を授かり、京都市立芸術大学では客員教授も務めています。

京都市では、「景観法」ができた後、景観行政に関わり、現在も京都市美観風致審議会の会長を務めています。また、崇仁学区のまちづくりでは、三村浩史京都大学名誉教授の下で3年間ほど、まちづくりの委員会にも関わらせてもらっています。

京都市立芸術大学については、移転に際してのキャンパスのプロポーザルの委員長を務め、その後、アドバイザーとなり、非常に関わりが深いです。

このエリアに関しては大変関心を持っており、京都駅の玄関口で、京都駅と東山の文化エリアを結ぶ大変重要な立地になっています。立地というのはすごく大事で、日本全体で人口が減少するため、コンパクトシティ化の動きがあつて、その中で「拠点形成」あるいは「立地適正化」という言葉でよく言われますが、色んなエリアをうまく立地させていこうと、京都全体では幾つかのヒューマンスケールの都市エリアをコンパクトシティにし、複数のエリアを定めて、それらの集合体として京都らしさを推進していこうとしています。

この京都駅東部エリアは京都の中の文化芸術エリアの中心拠点になります。その核として、このエリアに平成29年に京都美術工芸大学が開設され、5年後に京都市立芸術大学が移転してきます。京都駅東南部エリアでも文化芸術を推進していますし、北の方へ行くと岡崎エリアに繋がっており、京都の文化芸術の大事なエリアとして、この京都駅東部エリアを形成していく必要があります。

課題は、そういう文化芸術ゾーンの創出に向けて、特に若い人たちやクリエイターたちに京都で活動し、世界と交流していってもらわないといけないし、これから人口が減少していく中で地域コミュニティの活性化も図らないといけません。コミュニティ形成の大事な拠点になると思います。その中で新たな賑わいの創出、あるいは回遊性の向上を図る必要があります。そういったことを踏まえた大事な計画を作ることが、この委員会のミッションだと思います。

委員の皆さんには、それぞれの専門分野、あるいは立場から、御意見をいただきたいと思います。個別の分野だけでは対応が難しく、横断領域的に色んな問題を考える必要がありますので、それぞれの立場から、少し俯瞰的な、全体的な立場で御意見をいただきたいと思います。

これからのまちづくりは、トップダウンの都市計画だけでなく、そこに関わる様々な主体のコラボレーション、つまり協働してまちづくりを進めていく必要があると思いますので、そういう視点からも、ぜひ御意見ををお願いします。

また、皆さん色々なところで活動されていますので、周囲の方々にも、この京都駅東部エリアの活性化について、一つのムーブメントとして展開していくことにお力添えをいただきたいと思います。よろしくお願いします。

7 委員長職務代理者指名

門内委員長が寺川委員を指名。

8 議題

- (1) 京都駅東部エリアの現況
- (2) 京都駅東部エリアのポテンシャル及び課題、今後のまちづくりの方向性

【資料3及び4につき、事務局から資料説明】－省略－

◆門内委員長

それでは議題の審議に移ります。まず（１）京都駅東部エリアの現況，（２）京都駅東部エリアのポテンシャル及び課題，今後のまちづくりの方向性について審議します。

ただいま事務局から資料の説明がありました，京都駅東部エリアの現況とポテンシャル及び課題について，委員の皆様から御意見をいただきます。

まちづくりを進めていくときは，新規に更地を開発する訳ではなくて，現在ある地域のポテンシャル，資源を活かしていくことが大事になります。その資源の状況から可能性をくみ取った課題を４つに整理していただいています。

最初なので，まずは皆様から順番に御意見をいただきます。御自身の活動や専門分野なども簡単に御紹介いただきつつ，このエリアのポテンシャル及び課題の掘り下げや，それらを踏まえた京都駅東部エリアのまちづくりの方向性について，自由に御意見ください。

また，資料の説明の中で分からないことがあったら，それを述べていただいても構いません。他にも抜けている視点などがございましたら，御指摘ください。

それでは赤星委員から，よろしくお願いします。

◆赤星委員

京都市観光協会と京都文化交流コンベンションビューローの赤星です。

京都市と一体となり観光振興をお手伝いする団体に身を置いています。

観光と言っても色々ジャンルがあり，京都観光を長年支えてきた修学旅行誘致もあれば，JRと協業した国内観光客誘致もありますが，私の主な専門分野は，インバウンドと言われる外国人観光客の誘致や，海外の諸外国に向けた京都情報の発信，ブランディングです。

また，コンベンションビューローにおいては，国際会議誘致支援にかなり力を入れており，数多くの会議の京都誘致に成功しているところです。

観光にしても，国際会議にしても，今，京都の世界の中でも非常に注目されています。京都は諸外国に比べても非常にマーケットが拡大しており，世界的に著名な雑誌における数多くの観光地のランキングでも常に上位を占める地域となっております。

一方で，今問題になっているのは，観光客が増え過ぎて，京都市民の皆様の日ごろの生活にトラブルや支障をきたしている，あるいは違法民泊が増加して安心な市民生活がままならない，という状況があります。その中で，いかに市民の皆さまと調和した，持続可能な観光を目指していくかということが，私どもの大きなテーマであり課題です。

そういった中でこのような地域の活性化，地域のまちづくりビジョンを作る会議に私が参加するに当たって，観光地づくりという観点から申しあげますと，全ての地域が一様に、数多く

の観光客を誘致し、観光地として成功するのは、なかなか難しいという点を申し上げたいと思います。

つまり、各地域に於いて役割分担が必要で、たとえば、京都には東山や嵐山という、まさに京都の観光を代表する地域があります。京都中のすべての地域が京都観光を代表する観光地にはなりえないわけであり、重要なことはそのような人気観光地エリアに対して、この京都駅東部エリアが、どういう役割を担うべきか、あるいは、どういった相乗効果を生むための特長的な機能を持たせるべきかという点について、今後皆さんと議論しながら、私なりの意見を申し上げます。

また、観光は、経済効果的観点から申し上げると、「いかに一つのエリアで観光客の時間を使っていただくか」という視点が大事です。分かりやすく言うと、日帰り客よりも宿泊客の方が落とすお金は大きいので、いかに滞留してもらうか、いかに滞在時間を、このエリアで延ばしてもらうかということも非常に重要なテーマになります。

今後、京都駅東部エリアにどのように人を誘引して、1分でも10分でも1時間でも長くいてもらうために、どのように時間を過ごしてもらうかが重要であり、そういった交流施策も合わせて、今後議論したいと思います。

◆植田委員

京都美術工芸大学の植田です。京都美術工芸大学が東山地区に来たのは今年の4月ですが、どのように地域に馴染んでいくかが常に本学の課題であり、地域と連携しながら、色々なことをやっています。例えば、地域の祭りや体育祭、福祉祭りなど、色んな行事に参加しています。大学で行う文化祭にも、地域の人に参加してもらっています。体育館も必要に応じ開放し、地域の方々が自由に使える体勢を取っています。

高瀬川沿いのカフェで、本学の学生がカップを作るなど、そういった連携もしています。資料に「京都駅の東には、南北に流れる鴨川、高瀬川の潤い資源がある」とありますが、この高瀬川は非常に風情が良くて、今、下京区から予算を付けてもらい、川沿いに明かりを灯す事業も計画しています。

また、京都東山南部地域活性化委員会にも参加しています。太閤まつりは、まだあまり知名度がなく、昨年度は雨ということもあり、盛り上がりには欠けましたが、これから回を重ねるごとに、こうした取組も非常に有益になると思います。

大学はまだこのエリアに開学して1年半ほどです。これからもっと色々な地域の行事に参加していきたいと思っています。

◆長上委員

龍谷大学の長上です。社会福祉と地域福祉を専門としていますので、福祉の視点から何点か意見を述べたいと思います。

地域の活性化には、観光客が来ることも大事ですが、やはり一番の地域の活性化は住む人を増やすことです。この地域は京都駅からも近く、京阪本線もあり、非常に立地が良いということが、本日よく分かりました。しかし、立地が良いにも関わらず人口は減っています。増えて

いる地域は、おそらくマンションだと思いますが、マンションが建ち、若い世帯が入ってくるところは増えていても、他の地域は、ほとんど人口が減少していて、高齢化が進んでいます。立地が良いのに、なぜ住む人が増えないのかということを、もう少し掘り下げる必要があり、住む人を増やすにはどうしたらいいかを考えることも必要だと思います。

次に、地域にはそこで暮らしを築いている人がいます。その暮らしを築いている人たちが思い描くまちの形と、ここで議論するまちの形がマッチしないといけないと思います。委員には地元の会長もいらっしゃるので、地域で暮らしている人たちが、そこで暮らしを築くことをどのように思い、どのようなまちづくりを描いておられるのか、ぜひ聞かせてほしいと思います。その上で、このエリアのまちづくりを考えたいと思っています。

また、空き家率が高いことに驚きました。京都市全体でも空き家率は高いですが、5軒あれば1軒少しが空き家ということで、この空き家をどうするかも重要です。空き家が増えれば増えるほど地域は廃れていって、防犯上も課題になりますし、地域をきれいにする人がいなくなると、空き家から汚くなるので、空き家をどうするかは大きな課題です。空き家は所有者が分からないと、どうにもならないですが、所有者が分かれば、その空き家を芸大生や他の大学の学生たちの住む場所にして、まちづくりにも若い人が関わるができるような仕組みづくりができればいいと思います。今、そういう取組が、一部北の方で始まっていますが、高齢者と若者のシェアハウスのようなものができれば、まちの様子も少し変わるのではないかと思います。

あとは、マンションが増えると、やはり新住民と旧住民の交流も大事になりますので、新旧の住民の交流の場づくりも併せて考えられるといいと思います。

私は40年前に京都に来ましたが、七条通は40年前とは大きく変わりました。暮らしている人にとって、良いまちづくりができたらと思います。

◆鎌田委員

稚松学区の鎌田です。高齢化が進んでいる学区ですので、高齢者をマップに落として、それをソフト管理しながら、災害時などにすぐに分かるような状態を作る取組をしています。

高齢者、空き家が多いということですが、空き家は財産相続のときに揉めて、結局どうしようもないということが多いため、相続税の問題などを、もう少ししっかりと国や市がやってもらわないと空き家は増えると思います。

それと、今日この会議に崇仁学区の方が出ていないのは、努力が足りないのではないかと思います。早く言ってもらったら、私が引っ張ってでも連れてきました。

寺川先生も崇仁と関わりがあって、私も20年ほど前、崇仁学区のまちづくり委員会で、初めて先生方と御一緒し、それからずっと関わっています。

やはり崇仁学区の網で囲われた場所が、どのようにして使えるようになるのか、資料には国にお金を返さないといけないと書かれていますが、商業施設などはっきりと使える場所にしてもらわないと、崇仁はいつまでたっても網の囲いの多い寂れたまちになると思うので、あの囲われた土地をうまく利用できるようにしていただきたいと思います。

もう一つは、観光で人が寄ってくるということですが、東西本願寺を我々の中に入れてい

ただいたらいいと思います。坊主はなかなかこういうところへ出てきませんが、興正寺や佛光寺もあるので、そういうところも皆、我々の輪の中へ入ってもらって、地域のことを考えてもらったら結構かと思います。

東本願寺は、割合に外向きの目がしっかりしておりますし、出てこられると思います。もし出てこないなら私も誘いに行きます。観光の面でも、東西本願寺ありますが、特に西本願寺は国宝級のものがありますので、西本願寺の方にも入っていただければ良いと思います。職員の方に頼めば、ある程度、西本願寺も来られると思いますので、皆さんの御協力をお願いしたいと思います。

◆佐藤委員

京都市立芸大の2014年にできた芸術資源研究センターという研究所で、専任研究員をしている佐藤です。

私は、もともと文化人類学をやってしまして、1990年代の半ばごろからHIV感染という病気の研究をしていて、社会的に差別された病気とともに生きている人たちの暮らしの在り方や、そういう人たちを支援する民間の活動など、社会の病気についてのイメージを変える芸術家の活動などを研究していました。

2010年代に入ってから、東日本大震災で被災された方たちの被災地での経験、復興の経験など、そうした非常に小さな声を含めて記録していく活動を仙台市の仙台メディアテークという施設が行っており、その活動の研究をしてきました。最近では、歴史に残りにくい小さな声を集め、記録して継承していくコミュニティアーカイブという活動の研究をしています。

御縁があって昨年度から京都芸大に来たのですが、私が勤めている芸術資源研究センターは、次の創造活動に役立つような資源とは何かということを研究していて、言い方は悪いのですが、終わってしまった過去の芸術活動の記録というよりは、次の創造につながる過去や、今の芸術活動をどう記録して、あるいは、それを次の活動に活かせるような形でどうやって残すかということの研究をしています。広い意味で教育と言えますが、今たくさん、いろんな形で芸術的な創造活動は行われていて、形に残らないものが非常に多いです。演劇は、その代表ですが、そういうものをどう残すかということを考えています。

京都芸大は今度、崇仁に移転しますが、二つほど言いたいことを言いますと、一つ目は、将来像を考えることは、ある意味、現状を壊すことです。その現状を壊すことが持っているインパクトを、そこにお邪魔する者、そこを更地にしてしまう者として、なくすことはできないものの、できる限りなくしたいと考えており、その変化を、どう着実なものにしていくのかを考えるために、今の崇仁の様子や町並み、人が暮らしている様子やその声を、私も記録していこうと個人的に思っていて、大学としても、そういうことをしていこうと思っています。将来像ということの前に、現状を伝えていかないと、その地域を新しくするにしても、ここがどういう場所だったのかを忘れられてしまっただけではいけないと思います。

二つ目は、文化芸術はこの委員会でも非常に大きなテーマですが、鷲田清一学長が昨年度の卒業式に、「芸術家というのは自らを表現するのではなくて、社会の中の声にならない叫び、小さな声や叫び声、痛みや怒りといった、そういう言葉にならないような声やつぶやきを聴き

取る器である、芸術家とはそういう人なんだ。」とおっしゃっていました。

芸術文化というと、非常に晴れやかな美しいものを想像されると思いますが、今の日本の現状や芸大に來ている学生さんたちの関心、これからの社会の趨勢などを考えると、これからの芸術文化は世の中の明るいテーマだけを扱うものではなくて、むしろ社会の中の問題や、鷺田学長がおっしゃったような声にならない声を広く共有していくような、そういう広場とか交差点みたいなものになるのではないかと考えています。

新しい芸大のキャンパスも、そのような場所になればいいと思いますので、そういう場所を、このエリアに作っていくことに私たちも、あるいは私個人も参加していければと思っています。

◆門内委員長

ありがとうございます。景観や環境などは、東日本大震災でも津波で全部流されて初めて分かることがあって、何気なく見ていたたばこ屋が私を支えていたとか、普段は気が付かないもので大事なものはたくさんあって、そういうものを大事にしていくことは大切なことだと思います。

◆高岡委員

京都美術工芸大学工芸学部3回生の高岡です。学生で、こういう会議の場に参加するのも初めてで、地域を活性化させる将来構想の策定に関わるのも初めてなので、至らないところはたくさんあると思いますが、若い声を少しでも発信してほしいということで、呼んでいたと思います。

私は、このエリアに引っ越してきて1年ほどです。昨年の4月に学校が移転し、8月に引っ越してきました。まちを歩いていても全てが新しく見え、その目だからこそ見える部分や、ここは何でこうなっているのだろうと思うことなどたくさんあるので、それらを出していけたら良いと思います。

先ほど植田委員からもあったように、大学がこちらに移転してから、地域の方と関わるが多く、その輪は濃いのではないかと私は思っていたのですが、あまりその連携がうまくいっていないということや、今やっているところということ、たくさん聞くことができました。もっと若い人が何か発信していくべきと感じています。今日初めて知ることにも本当に多く、様々な活動や計画について、私は本当に何も知らなかったとすごく感じたので、それらをもっと若者がたくさん知ることができたら、「じゃあ、自分たちはこれができるのではないか」といった新しい発想をもっとたくさん出てくると思うので、若者に向けて情報発信していくことが大事だと感じました。

◆谷中委員

谷中です。私は京都に生まれ、京都で育ち、15歳のときに単身イギリスへ留学した経験もありますが、京都に対して本当に色んな思いを持ち、今ここにいます。

先ほど、鎌田会長が崇仁地区の委員が今ここにいないと話されましたが、私は崇仁の河原町七条の南西で事業をしています。その場所に対して思うことは、やはり色々あります。

私は留学経験から、日本人あるいは日本と海外とで違うことがすごくたくさんあることに興味を持ち、大学は京都に戻り、比較文化を研究しました。

現在は、足つぼのリラクゼーションのサロンを経営しています。主に海外の伝統療法で、要は日本人の体、筋肉形成や骨格と、海外の方との違いに興味を持っていて、なぜ日本人はこういう体質なのかということに興味があり、5年前にこの事業をスタートさせました。

そういう視点で物事を見るタイプで、事業を始めるに当たっては京都のどこに店を置くか、河原町、烏丸、太秦など、色々考えた中で京都駅しかないと思いました。

その理由は、イギリスに留学したのは1992年頃でしたが、当時ロンドンでは絶対に行っ
てはいけないと言われていたエリアがありました。去年20年ぶりにロンドンに行くと、そこ
が劇的に変わっていました。ここ10年ぐらいで若い人やクリエイターたちが再生をさせた土
地となっていて、実際に宿泊し、そのエリアを歩いて回ったら、すごく楽しいまちになってい
ました。

それを目の当たりにしたときに、京都人として生まれ、京都人として育ち、就職で東京に
行ったこともありましたが、外から京都を見た経験も踏まえ、京都はすごく魅力のあるまち
で、京都人が思っている以上にポテンシャルがあるまちなのに、京都人自身が、そのポテン
シャルに実は気付いていないことに気付きました。

京都は河原町エリアも烏丸エリアも、もうほとんど場所はないと思いますが、京都の玄関
口である京都駅の近くにある崇仁には残っています。しかし囲いがあります。私のサロンの
裏がまさにそういった場所で、本当にもったいない場所になっていると感じています。そこ
を盛り上げることと、地元に住んでいる人のイメージを変えていくことが必要だと思います。

崇仁に店を構えたとき、なぜそこにしたのかとよく言われました。ただ私の頭の中では、
芸大の移転が決まり、京都市もこの地域にポテンシャルを感じていると思っていたので、必
ずこの場所は変わると感じていました。だから私も、ここの活性化に繋がる何かをしたいと
思い、この場所に店を構えることにしました。

海外によく行きますが、色んな国やエリア、まちを見ても、だいたいもう既に作られていて、
正直どこも同じものばかりです。ブランド物や、東京でもあるようなものばかりです。

そういうものではなくて、京都にしかできないオンリーワンのものを京都には作っていつて
ほしいと思います。だから私はこの場に参加し、僭越ながら、一事業者、一京都府民、一京都
市民として、意見やメッセージを伝えられたらいいなと思っています。

◆丹治委員

七条商店街振興組合の理事長の丹治です。

稚松学区の隣の皆山学区の連合会の事務局もしており、皆山学区として、崇仁学区のまちづ
くりに関わってきましたが、そこでの感覚も踏まえつつ、今回は七条商店街の理事長という立
場で参加しています。

先ほど説明がありましたとおり、七条通は西大路の方から七つほどの商店街に分かれてお
り、七条商店街は堀川から下京渉成小学校がある間之町高倉までを預かっています。

今まで、東山区には、三十三間堂があり、智積院があり、国立博物館があり、とてもいい文

化ゾーンだと思っていました。また鴨川があり、芸大が来るということで、より文化ゾーンとして東山区の方々とも繋がることができると、期待した思いを持っています。

下京と東山の文化ゾーンをつないで、芸大が繋がれば良いという思いを、商店街の理事長としては思っています。ただ下京区の皆山学区民としては、このことにより、確かに、一つのまちの既存の部分が壊れることもあると思っています。そういう意味で寂しい思いもありますが、商店街として商業ベースで考えていくことも大事なことを考えています。

私は京都駅西部エリアにも関わり、色々見っていますが、商店街の関わりはなかなか難しいものです。我々は商店主なので、商業の盛り上がりも必要です。芸大という、私たちには少し意味の分りにくい大学を、どう商業ベースに考えたらいいのかと考えています。

商店街の理事会で報告するときは、やはり商業ベースの話ばかりになります。地域のことが分かっている方というのも、実はあまりいないのが現状で、こういう会に参加し、皆さん方の思いを、商店街の方にも伝えていきたいと思っています。

七条通沿いの商店街は7つあり、文化の薫りがする文化ゾーンとして七条通が繋がればいいなと思います。そしてまた、稚松、菊浜、植柳、皆山、崇仁学区という古いまちの薫りが少しでも残りつつ、良いまちの方向に向いていけばいいなと思っています。

こうして、いろんな人の意見を聞かせていただき、どの方向に行くのか不安な部分もありますが、また色々と言いたいと思います。よろしくお願いします。

◆寺川委員

私は近畿大学の建築学部で学生に建築を教えています。専門は地域マネジメントで、まちづくりと建築に携わっています。

この地域においては、「京都市立芸術大学を核とする崇仁エリアマネジメント」のサポートをしています。この間色々と、渉成5学区の方々と一緒にあって、崇仁学区を含めた5学区を、どのように活気づけていくか、まちを良くしていくか、ということのお手伝いしています。崇仁新町も、その中で生まれた賑わいづくりの拠点として、私も理事をしています。これが何とか動きだして一つの形になれば、モデルとして広がれば良いと考えています。

同時に、東九条の方の京都駅東南部エリアのまちづくりにも関わっており、私自身が今回の形で参画することの意味は、エッジを考えることかと思っています。つまり、このゾーンとしては一応京都駅東部エリアですが、やはり東南部であり、西部であり、そのいろいろなエッジのまちを、どうやって繋ぐかが非常に重要なテーマになってくると思います。まちというのは点だけではないので、その間をデザインしていくことがとても大事で、繋ぐデザインというのは、人や物や事を繋いでいくということになります。

空間的に言うと、高瀬川は北から南へずっと下りてきて、まちをつなぐ緑のシンボルでもあり、色んな活動もあります。そういうところから何かを生みだしていく一つのきっかけにこの東部エリアがなるのではないかと感じています。また、横軸で言いますと、当然、文化ゾーンがあり、商店街が横にずっと並んでいます。こうした横軸と縦軸がまちをつなぐ仕組みとなることで、このゾーンが持つ可能性はすごくあると思っています。

それから、崇仁エリアをはじめとして居住の問題、つまり、住んでいる方々がこれからどう

なるかという点も非常に重要なテーマで、特に開発によるディスコミュニケーションがないよう、まちが持っている文化と歴史を人々がどのように継承しながら、このまちをつくり上げていくかという視点はとても大事です。

一方で、インバウンドの世界の中で交流人口がどんどん減っていくので、滞留する人が増えていきます。だから滞留と定住、ステイとホームの間を、どのようにマネジメントしていくかもとても大事で、定住だけを考えていても人は集まってこないし、新しい人が、ぐっと入ってくると、元いた人たちがいなくなったり、住みにくくなったりということがあります。とはいえ、滞留から生まれる定住もあるので、暫住というかたちで、交流から人口を増やしていきながら、人がこのまちと繋がっていくことを目指す視点も必要と思います。

それと、特にこういう社会構造を考えていく上で、マスタープラン的に考えることは当然必要なことで、最近、都市計画やまちづくりを考えると、まちで起こるいろんな動きに対し、動きやすい環境を作って、基石を打つように、いろんな場所で起こる出来事が繋がるような立ち上げ方と言いますか、そういう広がりを持った、動きやすい環境を、こういう構想策定の中で、うまくイメージできていけば良いと考えています。

◆松永委員

素晴らしい話で私も楽しみにしていますが、まず私たちの方の東山区貞教学区の現状をお話しします。

私どもの学区は超少子高齢化が進んでおり、先ほどからもあるように、歯抜けのような格好で、ちょこちょこ空き家があつては、ゲストハウスとなっていくような地域です。

御高齢の方が大変多いですが、お風呂屋さんが商売にならないということもあり、商店街は七条と正面がありますが、両方とも寂れてしまい、お風呂難民、又は買い物難民という問題が、かなり大きくなってきています。

七条、正面から南に住んでいる方は京都駅前の方まで買い物に行く方も多いし、お風呂もそこまで行く方もいます。京都駅東部エリアとは、少し違うかもしれませんが、そういうものもできると嬉しいと思います。

また、先立ってから災害がかなり起こっていますが、そのときの避難所を、今京都美術工芸大学に門戸を開いていただき、活用させてもらえるようになっています。また、国立博物館も避難所の一部になっていますが、観光客が大変多い地域ですので、京都駅で列車が止まったりすると、みんな泊まる場所がなく、それらだけでは、とてもじゃないですが吸収できませんので、避難所に活用できるものも新たにできないかと思っています。

七条通の方は、観光客が多くて、地域の方がバスに乗れないという路線も出てきています。私たちは東山の方まで出ればバスに乗れますが、七条通ではバスを利用できない、駅の方に向かう時も歩いて行かなければいけないということも起こっている地域です。

様々な分野の皆さんの話を聞きながら、いろいろなことを若い方に託しながら、地域とともに進んでいきたいと思っています。

◆門内委員長

寺川委員からもあったように、都市エリアをデザインしていくときは、その中にある、様々な資源を繋いでいくことがとても大事です。

前に岡崎地域活性化ビジョン検討委員会の委員長をした経験がありますが、そのときも、岡崎の中にある様々な施設をばらばらではなくて、例えば国際会議に来て、夜は美術館を開けてもらい、帰りに平安神宮でお参りして帰るというようにつないでいくと、トータルの経験ができます。ばらばらではなくて、いろいろなものを繋いでいく中から価値ができてくるだろうと思います。

そのときに大事なことは、やはり、そこに生きている人、生活している人たちだけではなくて、観光客で来たり、関心を持って集まってきたりする関係人口も大事です。

大学生は定住民なのか、遊牧民なのか、ちょっと分からないですが、昔、上田篤先生が、そういう人を流民と言っていましたが、何年か滞留すると、いろんな滞留の仕方があって、いろんな関わり方が出てきます。

そこではいろんな世代の人、いろんな考え方をしている人が集まってきますが、多様性がすごく大事で、多様でありながら、コミュニティを組んで、何か共通の基盤を持っている。いろんな人が集まってくることによって、新しい発想や新しいクリエイションができてくるので、多様性は大事です。

京都というのは本当にいろいろな人が集まってきます。私は、京都大学を出て、その後、東京大学の大学院に行き、東京に31年住んでいました。東京では、京都駅を設計された原先生の助手を10年間務め、京都大学に戻ってきました。

いろんな場所を巡って帰ってきて、京都がやはりすごいと思うことは、すごく多様な人たちがコンパクトなエリアの中に住んでいることです。東京は何でもあります但離れています。京都は、すごくコンパクトなエリアに住んでいて、京都大学でもそうでしたが、いろんな分野の先生たちと接点ができていきます。

例えば講演会に行くと、1回講演して、2回目に行くと、3分の1ぐらい聴衆が重なっています。同じネタは1回しか使えなくて、次のネタを仕入れていかないと、あの人は同じことをしゃべっていると言われることが分かって、勉強もさせてもらえます。今日しゃべったことが、気が付いたら、もう次の日には話が回っているということがよくありますが、そうした接触の中で新しいクリエイションが生まれてきます。

20世紀は工業社会で、物を作ることと物質的な豊かさを追いかけてきましたが、21世紀は知識社会という形に変わってきています。

石油など資源はもちろんそれもありますが、人が資源です。ヒューマンリソース、人的資源が集まり、対話、コミュニケーションの中で新しいクリエイションやリノベーションが作り出されます。それが価値を生み出す時代に入ってきています。

京都は昔から、そういうことをやってきた都市で、そういう心の豊かさを求める時代に、京都はさまざまな多層性、多様性、多義性を持っていて、いろんな人たちが集まってくる場所です。

そういう京都の特性の中でも、とりわけ、このエリアは、これからクリエイターたちが集積していくという方向が出てきていて、実際、文化芸術、あるいは宗教の様々な施設が集積

してきています。そのポテンシャルを活かして、心の豊かさや命の大切さを感じることができ
るようなエリアを作っていくこととなります。

建築とか都市のデザインをしていますと、どのぐらいのスケールでものを考えていくのかと
いうことが大事です。まちづくりで成功したアメリカのポートランドという都市はおおよそ60
mのスケールで街区を区切っていました。

京都の碁盤の目は、一条、二条の間が120mで、京町家は平均5mです。そうすると、5
で割ると24軒。両側で48軒です。日本の集落の平均的なスケールはだいたい50戸で、ち
ょうど京都のまちがヒューマンスケールに合っており、京都は人と人が付き合いやすいスケ
ールでできています。そういう個性のあるものを作って、それが集まって重層的な京都らしき
ものができるので、そういう意味では、この崇仁学区や京都駅東部エリアを、文化
芸術のコアとして、多様な人が集まってくるエリアにしていくことが大事です。

その上で大事になるのは、先ほどからも話がありましたが、モビリティ、つまり足です。移
動手段をしっかりさせて、歩けるまちをサポートするようなモビリティを考えていく必要があ
ります。

それから、これからの時代は、情報システムが発展してきているので、いろんな情報シス
テムが都市の中に埋め込まれています。例えば、スマートフォンに「日本建築が好き」と言え
ば、まちなかにある日本建築の方から「私はこんな建築です」と語り掛けてくる時代になっ
てきています。

先日、都市デザインのことで三菱電機に行ってきましたが、そんな会社も、まちづくり、都
市づくりに、すごく関心を持ちだしています。京都駅東部エリアで一つのモデル地区作りが
できればいいと思っています。そのポテンシャルは十分なエリアだと思っています。

まだ少し時間がありますが、どなたか御意見ございませんか。

◆鎌田委員

市の方々にはもう少し、崇仁学区の空き地を何とか開放できるように動いていただきたい
です。地域住民も東京まで行って陳情するぐらいの努力をしないと、なかなかあの土地問題
は解消しないと思います。あの土地問題が解消しないと、いつまでたっても、皆さんの御意
見のようなことが進まないと思います。

土地が一番大切だと思いますが、地元の住民はやってもらえないと不服に思っているよう
です。それは間違いであって、もう少し互いに話し合っ、いろいろなことができるように、ま
た完成するようにすることが必要だと思います。そういう機会をつくってもらって、もう少し
深く地域の方々の理解を得て、一緒に好きなことが言い合えるようになってもらいたいと思
います。

◆門内委員長

今、鎌田委員がおっしゃった問題には、こういうビジョンを考えると、長期的ビジョ
ンを考えることと、今すぐ解決できるようなことと、いろいろあります。空き地を使えるよ
うにする問題も、恒久的に開けるとしたらなかなか難しい問題でも、例えば大学生が入って、

イベントなどで一時的に開けて使っていくというのを段階的に少しずつやっていくという考え方もあります。

そのためには、市だけではなく、まちづくりをしている方や大学生が一緒になって、少しでも開けて使ってみると、また違った視点が出てきます。新しい世界が出てきますので、大きな方向と同時に、すぐできることもやっていくことも必要です。

まちづくりというのは、大きく分けるとパブリックセクター、つまり公共サイドでやる話と、企業の方などがプライベートセクターでやっていく話と、それから住民やコミュニティがやっていく話と、こういう違う立場の人が協働しないと、うまく動きません。

そういう意味では、いま閉じられているところを、ちょっと開けていくような、異なるセクター間のコラボレーションが実験的にでもできたら面白いと思います。

◆寺川委員

崇仁新町も、今までフェンスで閉鎖されていた京都市の土地を開放して、暫定的に2年半活用し、そこに賑わいを生みだす取組です。京都市も制度的に頑張ってもらったと思いますが、それで人が集まったり、何か新しい出来事が生まれたり、次の空き地はどう使おうかといった広がりも出てきます。

このような公共用地問題や、空き地や空き家といった、このまちにある資源をうまく使いこなせるきっかけが、今回のビジョンの中に入れられればと思います。

◆鎌田委員

崇仁新町に関して言うなら、もう少しきれいになるといいと思います。

◆門内委員長

これから芸大が入ってくると、アートの活動も移転前にイベント的にされると思いますが、それらと連携すれば、何かできるという気がします。

この委員会では京都駅東部エリアの将来構想を作りますが、ビジョンというのは大事で、ヨーロッパの都市では、まちづくりを行う人たちがフューチャーセンターというものをつくって、未来のこのまちはどうあるべきかという話し合いを日常的に行っています。そのコミュニティレベルで描いた未来を実現するには、今何をしたらいいかを議論するところもたくさんあります。

ビジョンをちゃんと作り、そのビジョンを絵に描いた餅にせず実現に持っていくには、行政レベルで描いた絵だけではなくて、まちづくりの担い手、住民の活動、あるいは商店街の活動など、いろいろなものとリンクしていかないとはいけません。そういう意味では、ビジョンはみんなのものとして、じぶんごととしてやっていかないといけなくて、そういう実験的なことも非常に大事です。

私は今、芸大のキャンパスのことに関わっている中で、芸大が閉じた領域にあるよりは、例えば芸大生や美工大生が、都市の中に空き家があれば、そこを芸術のステーションのような形にしてバイオリンを演奏したり、絵を描いたりとサテライトのようなものが、まちのなかにあ

って、光が灯っていたり、あるいは大学の中に、コミュニティの人たちが入っていける場所があったり、そういう連携やネットワークができると良いと思っていますところ。

◆長上委員

まちの中に大学のサテライトを作るのは、とても良いと思います。そこに、芸術関係のブースがあって、地域の高齢者などいろんな人が寄って、いろんなことを話し合えるような場所、拠点があれば本当にいいまちになると思います。そういう仕掛けが必要ではないでしょうか。

◆門内委員長

福祉の問題でも、例えばハンディキャップがある人や高齢者など、そういう人たちが、どのように社会の中に在るのかということが、そのエリアの社会の文化のレベルになると思います。そういう少し立場の弱い人たちをきちんと扱うことは大事なことです。

歴史を担ってきたエリアだからこそ、他のエリアでは分からないような優しさがあり、そんな側面も、まちづくりに入れていくことができれば良いと思います。その辺りについて、佐藤委員御意見いかがですか。

◆佐藤委員

京都芸大は、音楽学部も芸術学部も、プロの演奏者やプロのアーティストを育てるのが大学の使命ですが、就職率が非常に低く、大学を出た後に10年ぐらい苦労する方が多いです。それでも頑張ろうというような大学です。

そういう意味では最初から弱者といいますか、助けてもらわないと、やっていけないような生活をしています。創造する人間として生きていくことが非常に大変な環境の中で、社会情勢的にも、国の仕組みとしても、ほとんど保護がないような状況の中においても、創造することに命を懸けていて、そんな部分で私も本当に学生を尊敬していますが、そんな学生がどさっとこの地域に来ます。

そういう意味では大学が崇仁に来ることは合っていると思います。卒業した後にいったん社会からちょっと浮いているところで頑張っていく場所として、この京都駅東部エリアに芸大が来ることは意味があるような気がしています。

そういう生活をしていく卒業生が暮らしていく。そこに定住し、制作活動もできる。つまり学んで、住んで、発表する。発表する場というのはギャラリーとか美術館ですが、それが収蔵されるのは博物館とか美術館です。そういう学びから歴史的に継承されていくまでの施設が、ある意味、全部そろっているエリアだと思います。

このエリアで創造的な活動を、大変な道を選んでいく人たちが、地域の人たちと手を取り合いながらできるようなまちになれば良いと思っています。

◆門内委員長

ありがとうございます。京都駅東部がそういうエリアになれば、例えば京都駅の西側にあるサイエンスの領域（K R Pなどが所在する京都駅西部エリア）とか、いろいろな特性のあるエ

リアの中で、この京都駅東部エリアが、また輝いてくると思います。

◆鎌田委員

大学生に2回ほど、われわれの学区や枳殻邸（^{きこくてい}渉成園）に来てもらい、写真展を開いたときに演奏をしてもらいました。非常に美しい方が来られ、こういう方がまちを歩かれるようになると皆に言いました。まちも変わると思います。

◆門内委員長

去年フランスへ行ったとき、大学の始まりの場所のカルチェ・ラタンというところを歩きました。ラタンというのはラテン語という意味で、大学はラテン語を話す人が来る、という意味だそうです。

何がカルチェ・ラタンかと思っていたら、ソルボンヌ大学とか、パリ第7大学とか、いろいろな大学があって、歩いている人のオーラや雰囲気にも独特なものがあって、これがカルチェ・ラタンか、コーヒーショップだけじゃないんだと思いました。やはりまちというのは人なので、そういう人たちが住んだり、集まってきたり、交流が起こったりすることが大事で、そういう人を大切にするまちができれば良いと思います。

特にアートはフィーリングや感性ですから、今までどちらかというと切り捨てられてきたものを大事にして、まちを考えていくことも必要だと思います。

それでは、今日皆さんからいろいろな御意見をいただきましたので、これらも踏まえて事務局の方でまとめていただいて、次回の委員会で議論をしていきます。

(3) 今後のスケジュールについて

【資料5につき、事務局から資料説明】－省略－

◆門内委員長

そろそろ終了の時間ですが、もし本日発言できなかった意見や、その後、思いついたり考えたりしたことがあれば、随時、事務局までメール等で御連絡いただければ、次回の検討委員会で紹介するなどして議論に活かすことができます。できるだけ多様な意見を活かしていきたいと思うので、よろしくお願いします。

最後に、事務局から何かありますでしょうか。

◆事務局

活発な御議論、ありがとうございました。しっかりと受け止めてまいります。

第2回委員会の日程については、後日調整させていただきますので、どうぞよろしくお願いします。崇仁学区の方も含め、しっかりと地域の方とも意見交換をした上で、この検討スケジュールに沿うような形で進めていきます。

第2回の最終的な日程については、委員長とも相談をして、また皆様にお伝えします。

◆門内委員長

それでは、閉会とします。

(終了)